

環境庁委託

第 2 回 自然環境保全基礎調査

植 生 調 査 報 告 書

1979

青 森 県

目 次

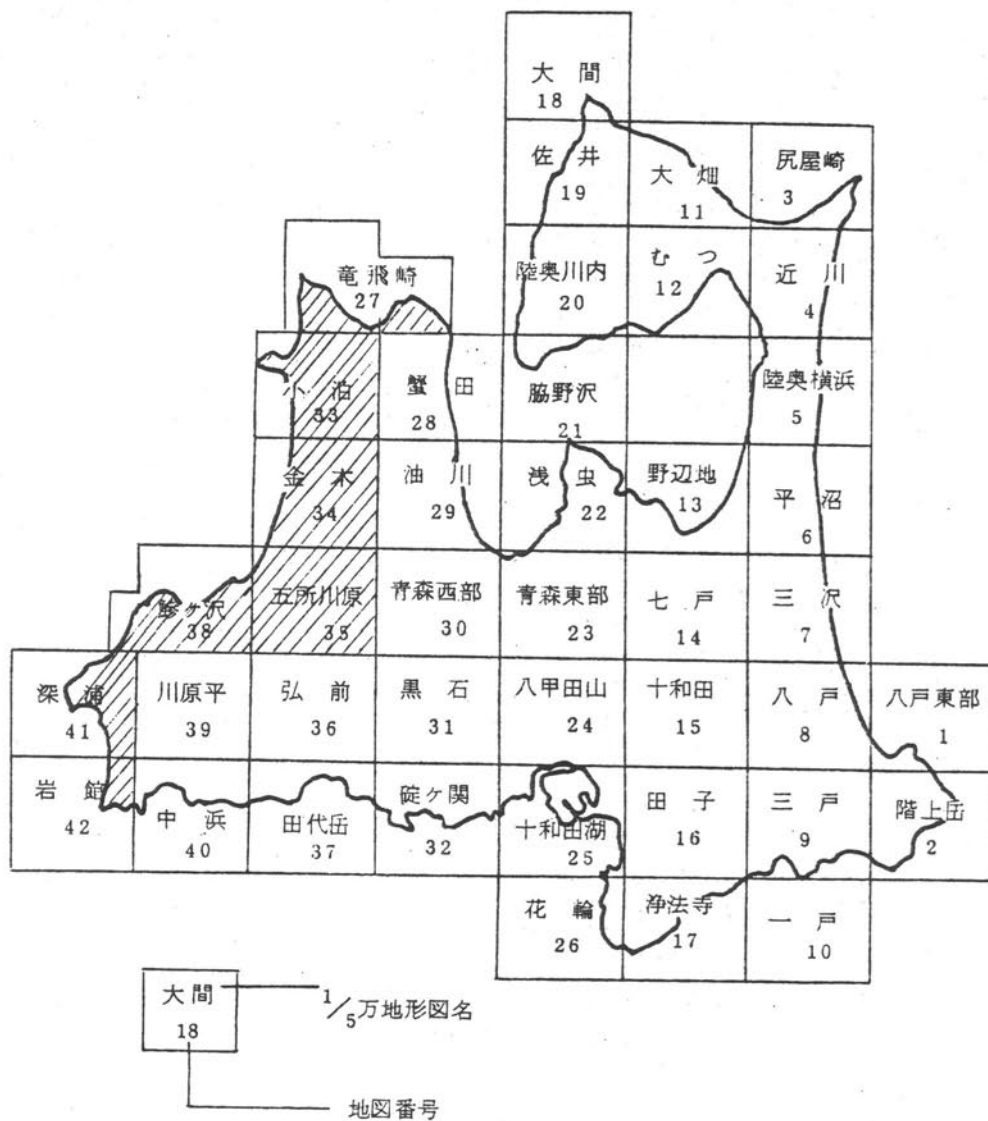
1. 調査概要.....	1
2. 調査対象地域図	2
3. 凡例解説.....	3
4. 植生調査表	13
5. 資料リスト	49
6. 調査担当者名簿	49

1. 調 査 概 要

本県は5万分の1地形図で42図幅であるが、今回植生調査を実施したのは、津軽国定公園を含む地域でもあり開畑、開田等の経年変化の著しい7図幅について調査した。(調査対象地域図参照) 調査の方法としては第1回自然環境保全基礎調査及び、昭和49年、50年に県単独事業で調査した成果品、また空中写真等を参考にしながら現地において植生調査を実施し、環境庁が示した植生凡例区分に従い現在植生図を作成した。

なお、調査は青森県自然環境保全調査会に委託して行った。

2. 青森県調査対象地域図



植生凡例一覧

(1) 自亜 然高寒 植山帯 生帯・	1 ササーダケカンバ群落 2 ササ自然草原	(5)ヤブツ ハキラス 自然植 生	22 ヤブツバキ群落
(2) 代亜 償高寒 植山帯 生帯・	3 ササ群落	(6) 植河 生辺 (各 クラス 域共 通) ・湿 原・ 塩沼 地・ 砂丘	23 ツルコケモモ・ミズゴケクラス 24 ヨシクラス 25 塩沼地植生 26 砂丘植生 (ハマナス群落を除く) 27 ハマナス群落
(3) ブ ナ ク ラ ス 域 自 然 植 生	4 チシマザサ・ブナ群落 5 マルバマンサク・ブナ群集 6 スギ・ブナ群落 (スギ天然林) 7 エゾイタナシノキ群落 (ミズナラ・イタヤカエデ群落を含む) 8 ヒノキ・アスナロ群落 9 クロベ・ヒメコマツ群落 10 ジュウモンジシダー・サワグルミ群集 11 ヤナギ低木群落 12 ハンノキ・ヤチダモ群集 13 自然低木群落 (カシワ群落含む)	(7) 植 林 地 ・ 耕 作 地 植 生 (各 クラス 域共 通)	28 アカマツ植林 29 クロマツ植林 30 スギ植林 31 カラマツ植林 32 落葉果樹園 33 畑地雑草群落 34 牧草地 (人工草地) 35 水田雑草群落 (イネクラス)
(4) ブ ナ ク ラ ス 域 代 償 植 生	14 ブナ・ミズナラ群落 15 カシワ・ミズナラ群落 16 アカマツ群落 (コナラを含む) 17 ササ草原 (チマキザサ群落含む) 18 ススキ群落 (ノハナショウブ・ススキ群集を除く) 19 シバ群落 20 ノハナショウブ・ススキ群集 21 伐跡群落 (タラノキ・クマイチゴ群落)	(8) そ の 他	36 市街地 37 緑の多い住宅地 (緑被率60%以上) 38 造成地、採石、採砂地 39 自然裸地 40 開放水域

3. 凡 例 解 説

亜寒帯・亜高山帯自然植生

(1) ササーダケカンバ群落

ダケカンバは亜高山帯針葉樹林の構成種として広く分布している。垂直分布的には針葉樹林帯より上部に分布するが、本県では日本海側に面して亜高山帯に針葉樹林を欠く高山にはダケカンバを主とした落葉広葉樹林が優占するところがある。

調査地域内では岩木山にこの群落が多く発達し、ほかに津軽半島脊梁部の四ッ滝山にも分布している。この群落は雪の吹きだまりとなる風背側斜面に出現し局地的な地形あるいは気候条件に対応した安定したものである。

群落構成種としては低木層にはチシマザサが優占し、このほかミネカエデ・オオカメノキ・ナカマドなどが出現している。

(2) ササ自然草原

人為的遷移の後退によらない自然のササ草原で、本県ではチシマザサを優占種とする群落である。この群落は山頂およびこれに続く脊梁部や風背側斜面の雪の吹きだまる多雪地に発達している。

調査地域では標高600m前後の山々、袴腰岳、矢形石山、四ッ滝山、大倉岳などの津軽脊梁山地に分布している。

群落内は矮化したブナ・ハイイヌガヤ・アカミノイヌツゲなどチシマザサーブナ群団と似た種類を数えるが、一部強い北西季節風によってチシマザサが矮化され、高山種を多く含む特異な植生も見ることが出来る。

亜寒帯・亜高山帯代償植生

(3) ササ群落

チシマザサーブナ群団が台風や人為的な影響によってこの群落が崩壊した後に二次的にチシマザサが優占した群落である。この群落は時間の経過によってもなっていくがブナ林又はミズナラ林に移行する。

調査地域では岩木山の山腹斜面に出現しているが、この外にチシマザサーブナ群団のブナを伐採した跡地に沢山出現するが、そのほとんどがスギやカラマツの人工植栽地になっているためこの群落から除外してある。

ブナクラス域自然植生

(4) チシマザサーブナ群団

この群団にはオオバクロモジブナ群集も含んでいる。この群団は、ブナを主とする群落のうちで適潤性な土壤環境で普遍的に見られるもので、いわゆるブナクラス域を代表する群落である。群落がやや疎開するとチシマザサが優占し、うっ閉するに従ってハウチワカエデ・ミネカエデ・ヒメアオキ・タムシバなどの木本の標徴種が増加し低木層が優占するオオバクロモジブナ群集に移行する。

本県では太平洋側のものも裏日本型ブナ林であり、調査地域では海岸地帯からブナ林が出現しているが、この群落は代償植生であり、現在では奥地や山地の上部にこの群落を認めるだけとなっている。森林性動物の保護には欠かせない群落となっている。

(5) マルバマンサクブナ群集

この群落はチシマザサーブナ群団のうちでヒメアオキブナ群集の上部に出現し、尾根筋とか、張出した凸斜面、または風当りの強いところなど、乾燥環境に分布するものである。一般に標高の高いところに分布し標徴種のアキシバ・マルバマンサクが普遍的に出現している。

この群落のブナは一般に形質、成長共に悪い。

調査地域では秋田県境に近い尾根筋の標高650m〜750mを中心に発達しているが、表層土の薄い尾根筋が下降している立地条件下では標高500m以下まで下降している。

(6) スギブナ群落(スギ天然林)

この群落は、スギ天然林の北限とされている 鯉ヶ沢町 土倉山山麓矢倉沢上流に部分的に見られるもので、ブナクラス域のスギ天然林である。この群落はスギが群状に散立し、林下にブナ・ミズナラ等の低木が出現している。本県では南津軽郡碓ヶ関村東虹貝川上流にも小面積分布している。

(7) エゾイタヤーシナノキ群落(ミズナラーイタヤカエデ群落を含む)

この群落は激しい海風とくに冬季のそれへの耐性の強い特種の落葉広葉樹を優占種とする北地海辺固有の樹林であって、本県では日本海沿岸地帯に見られる。海崖の中部以上で、比較的深土の安定した地形に発達する。この群落はとくに風衝の激しい所では低木林状を呈し、強い風から保護される場所に移るにしたがって次第に樹高が高まり高木林状となる。低木林状のものでは相観的にいちじるしい相違を示すが、構成樹種には両者にほとんど相違は認められない。

この自然のまま残っているのは非常に貴重なもので、近時道路の拡張や海岸林の伐採などによって特異な風衝樹形や群落が姿を消しつつあるので、今後ともこのままで保存したいものである。

(8) ヒノキアスナロ群落

この群落を広く観察すると高木層が被度ではブナがヒノキアスナロとほぼ同じ値をもつことがわかった。樹木の密度からするとヒノキアスナロがブナよりもかなり多くなっている。樹冠の被度では大差がないので、群落学的にはヒノキアスナローブナ群落とするのが妥当と思われる。部分的にはヒノキアスナロの純林状のところやブナの純林状のところもあるが、全体として見ると両種の混交林となっているものが大部分である。ここでは混交割合70%以上のものをヒノキアスナロ群落としてブナ・ミズナラ群落と区分して図示した。

亜高木層以下の下生植物の主なもの、すなわち、ハウチワカエデ・オオバクロモジ・ムシカリ・チシマザサ・ヒメアオキ・ハイヌガヤなどはいずれも裏日本型ブナ林の主要構成要素である。したがって種類組成からしてもこの地帯のヒノキアスナロ群落は裏日本型ブナ林のうちのヒノキアスナロの優勢な変型といってさしつかえない。

これらのヒノキアスナロ群落は完全な原生林というものほとんど残されていない。しかし旧藩時代から厳重に管理され、今日の国有林当局の経営方針も改善された形で択伐法をとっている。しかもヒノキアスナロと混生するブナやその他の落葉広葉樹も適度に残存し、混交林の状態が続くよう配慮されているので、これらの群落は開発されているとはいっても景観的には原生林に近い姿を保っている。

調査地域では津軽半島に主として分布しているが、西部山地には部分的に分布しているにすぎない。

(9) クロベーヒメコマツ群落

この群落はハクサンシャクナゲを標徴種とするもので、土壌堆積が薄く岩隙が多い立地条件の悪い環境に形成される群落である。

高木層はキタゴヨウ・ブナが優占種であるが、露岩の多くなるに従いブナは弱化し、キタゴヨウの勢力が強くなる。このことから、ブナ群団中、最も乾性の立地に発達するものとみることが出来る。

調査地域では西郡岩崎村の南部入良川上流部に極く少面積分布するにすぎない。

(10) ジュウモンジタダーサワグルミ群集

この群集はエゾアジサイ・ミヤマイラクサ・リョウメンシダなどを標徴種とするもので、ブナ林地帯の溪谷沿いに狭く発達する溪谷林である。土壌水分の良好な湿性環境に分布するが、水分は停滞水とはならないで土壌酸度も中性に近い。一般にサワグルミの単純群落をなしているところはなく、場所によってトチノキ・カツラ・イタヤカエデなどと混交して存在している。そしてこれらの高木層が良く発達するため低木層は貧弱であるが、逆に草本層は日陰を好む大形の羊歯植物が群落をなして見られることが多い。

⑪ ヤナギ低木群落

この群落はオノエヤナギクラスに含まれ、標徴種としてタチヤナギ・オノエヤナギ・イヌコリヤナギなどがある。湿原地帯の日当りの良い所とかやや大きな河川の上流部から中流部で洪水のさい時々冠水したり、泥の堆積する河原や中州などのやや不安定な立地に分布する。河辺林と呼ばれるこの群落は周辺の植生とも異なった景観をもち、しかも流れとの作用との関係からタデ類等の一年生草本群落、カワラヨモギ・ススキなどの多年生草本群落などさまざまな遷移段階を包括している。

調査地域内では岩木川・赤石川・追良瀬川・笹内川などの河川で良く見ることが出来る。

⑫ ハンノキ・ヤチダモ群集

ハンノキクラスに入るこの群落は地下水位が高く、しばしば水が地表に停滞するような湿地や泥炭堆積地に形成される湿地林である。実際には水分環境に応じて多様な出現状態を示しており、とくに雨季には地表が冠水するような場所にはハンノキが優占種となり、その下にカササゲ・ヒメシロネ・ミズバショウなどの湿性植物が繁茂している。ヤチダモは一般的にハンノキ生育地よりも陸側に出現し流路に沿った泥の堆積地や、やや乾いた場所で優占種となり、サワグルミやトチノキなどを混交するようになる。

本県では下北半島の宇曽利湖畔に見事な群落があるが、調査地域では十三湖畔にやや多く分布しているのみである。

⑬ 自然低木群落（カシワ群落）

海岸近くに風衝型をなして大きなカシワ純群落を形成しているところが多い。これはかつて藩政時代に飛砂防止のため植栽したものといわれているが、現在ではほとんど天然林化している。これよりさらにやや内陸部に入ると樹高4 m前後と高くなり、林内にはウワミズザクラ・エゾイタヤなどを混交し林床にはチシマザサが出現する。このほか内陸部には山火事や火入後に発達する二次林も分布している。

調査地域では北郡車力村の海岸砂丘に風衝型のカシワ純林が分布しており、屏風山周辺にはこの群落が多い。

ブナクラス域代償植生

⑭ ブナーミズナラ群落

ミズナラ林が一次林として存在するところでは、その上方のブナ林との移行地帯にブナーミズナラ群落が出来る。本県ではブナーミズナラ群落はほとんどがチシマザサ・ブナ群団のブナの伐採された跡地に再生した二次林である。高木層にミズナラ・イタヤカエデを混交し、樹冠

が疎開するための林床は明るい。亜高木層にはハウチワカエデ・ハクウンボク、低木層にはオオバクロモジ・マルバマンサク・ミヤマガマズミなどのブナ林の構成要素が多く見られる。

この群落はブナ群落への遷移途中相とされる。

(15) カシワ・ミズナラ群落

この群落は成因により二つに分けられる。一つは海岸砂地のカシワ林の遷移が進むと、土壌の形成などによる立地条件の安定化が進み、ミズナラやエゾイタヤが混入する林となる。高木層にはエゾイタヤ・ミズナラなどが優占種となり、低木層、草本層にもカシワはほとんど見られず、チシマザサ・ワラビ・ツリバナなどが見られる自然林である。また一つはブナ林下部で薪炭林としてひんばんに伐採される所に発達する典型的な二次林である。

調査地域では屏風山周辺に発達するカシワ・ミズナラ群落は自然林であり、あとはすべて二次林である。

(16) アカマツ群落（コナラを含む）

アカマツ・落葉広葉樹林の自然林は本県では少なく、とくに日本海岸の津軽地方には極めて少ない。

調査地域では五所川原市の丘陵地帯の乾燥した牧野跡に天然更新で成立したものを見ることが出来る。

(17) ササ草原（チマキザサ群落を含む）

草地植生の一つの構造であるこの群落は低山地の伐採跡地や採草地または山火事あとにこの群落が出来やすい二次群落である。

調査地域では各所に小面積ずつ点在するのみである。

(18) ススキ群団（ノハナショウブ・ススキ群集を除く）

このススキ型草地は本県では草地植生のうちで最も広く分布している。放置された畑地、採草地や火入地、海岸の風衝地や湿原の陸化して乾燥した所に発達する。放置された畑地にはヨモギと混交し、風衝地ではカシワ、採草地や火入地ではヤマハギ、湿地が乾燥化しつつある群落ではクサレダマ・ナガボノシロワレモコウと混交している。

調査地域では屏風山一帯に湿地性のススキ草原が分布し、西海岸鯉ヶ沢町付近の海岸段丘部に広大なヤマハギ・ススキ型草原が分布しているが近年次第にカシワやミズナラの本木類が侵入しつつある。

(19) シバ群団

草地植生のうち放牧によつて退行して出来たものである。

本県では八甲田山の田代平や萱野高原に代表的なシバ草原があるが、放牧を中止するとやがて

ススキ草原を経てアカマツ林へ移行する。

調査地域では北郡小泊村七ツ滝付近には現在も大規模なシバ草原が形成されている。

この場所は海岸に近いためハマヒルガオ・アオツツラフジ・センニンソウなど所々に侵入しているのを見ることが出来る。

(20) ノハナショウブススキ群集

ノハナショウブを標徴種とするこの群集は、ある程度の冠水を必要とし、屏風山においてはススキと混交する。ヒライ・ナガボノシロワレモコウなどが優占種となり、サワギキョウ・ムシヤリンドウなどが出現し、独特の景観をつくっている。

調査地域ではやや大面積に二ヶ所分布し一部にミズゴケの分布するところもある。

(21) 伐跡群落（タラノキークマイチゴ群集）

低山地帯の森林が伐採された跡地で各所に見られる群落である。一般に森林を伐採すると草本群落を経てクマイチゴやキイチゴなどが優占種となり、更に陽性なタラノキ等が加わった群落となる。

この群落はやがて遷移が進み ミズナラークシワーコナラ などの二次林となるか、又は人工植栽されて用材林となる。

ヤブツバキクラス域自然植生

(22) ヤブツバキ群落

この群落は、日本海側を北上して分布するヤブツバキクラスの北限地とされている。

文献等によると岩崎村鹽作岬の椿山は、かつて全山ヤブツバキ林だったというのが、その後山火事があって焼失し、今では、南面の斜面上部に見られるだけで、北面斜面はエゾイタヤを主体とするこの地方の海岸によく見られる群落となっている。

調査地域では、このほかタブの小群落や椿山より以南の民家裏にもヤブツバキの小群落があちこちに見られるが保存状態は良くない。

河辺・湿原・塩砂地・砂丘植生（各クラス域共通）

(23) ツルコケモモミズゴケクラス

ツルコケモモを標徴種とするこの群落は屏風山地域に見られるものである。

湖沼は腐植栄養型で独特の景観を持つ。この群落は、土壌の乾湿、地形の凸凹、遷移の段階などによって、種類組成がちがっており、それらがまじりあっているので変化に富む。高層湿原の発達したところは浮島を形成しムジナスゲ・ミズオトギリ・ホロムイソウ・ツルコケモモなどが

見られ、くぼ地にはフトイ、コタヌキモなどが多い。

湿原は特殊な環境下にその相観を維持出来るものであり、つねに移動しやすい性格をもっている。人為的な環境破壊にあえば、植生維持は極めて困難である。

24) ヨシクラス

この群落はヨシ・ドクゼリ・クサレダマなどを標徴種として低層湿原を形成している。低地から山地帯の池沼、流水辺に分布している。ヨシは生育の適応範囲が広く強酸性の栄養湖や塩沼湿地にも見ることが出来る。この群落は植物のほか水生昆虫、両生類、鳥類その他にとっても好適の環境であるが、埋め立て、干拓などの開発の対象となることが多く、自然のままの湿原は減少した。一方、耕作を放棄した水田が各地に生じ、これが湿原化している。

25) 塩沼地植生

この群落は満潮時に冠水する湿地に形成されるという生育環境が特殊であるため、これらの分布地は限られている。

本県では太平洋岸に多く、シバナ・ウミミドリ・ヒメキンボウゲなどが優占種となるが、調査地域である日本海岸ではシバナ・ウミミドリが優占種となりヒメキンボウゲを欠く。

この塩沼地も、埋め立て、干拓、河川改修などで消滅したところが多いので、わずかに残された群落は貴重である。

26) 砂丘植生（ハマナス群落を除く）

砂丘においては砂の移動や乾燥に耐性を有する植物が生育している。汀線近くのゴミの打ち上げる場所にはオカヒジキ・ハマアカザ群落が、飛砂の著るしい部分ではハマニガナーコウボウムギ群落が見られる。海岸段丘の砂の崩壊する下部にはスナビキソウの純群落が、段丘上にはハマニンニク群落、後方の安定帯にはハマナスやツルウメモドキ、ハイネズ等の低木群落が階層状に発達する。日本海岸ではハマゴウの群落も見られる。

27) ハマナス群落

海岸線に近いやや安定した砂地に大面積にわたって群落を形成するが、その広がりには汀線に平行して帯状をなす場合が多い。群落の上部は、ハマナスが優占種となるが、下部ではハマエンドウ・ナミキソウ・イソスミレなどの海浜植物が多く見られる。

近時、護岸工による海岸線の整備やクロマツによる海岸防災林の造成によって、この群落は各所に点在するだけとなっている。

植林地・耕作地植生（各クラス共通）

28) アカマツ植林

本県ではアカマツ植林地は太平洋側の南部に集中して分布しているが、調査地である日本海

側にも各所に散在している。各クラスに共通に植林されるが、特にスギの植林地として不適地となる乾燥した土壌や土層の固い理学的性の悪い土壌に植栽されている。

(29) クロマツ植林

江戸時代から現在にいたるまで、海岸の防砂、防風林として植栽され、汀線近くではハイネズ・ハマナス・オニシバ・ウンランなどの海浜植物が混入、後背湿地付近ではススキ・カセンソウなどが見られる。クロマツの疎開する部分にはニセアカシア・オオバヤシャブシなどが入り込む。落葉が腐植せず堆積し、比較的暗く、幹の下部にも枝が張り出して低木層、草本層の発達が悪いが、老齢化し安定した林分の林床には、ノブドウ・エビヅル・ツタウルシなどのつる性の植物やチマキザサ・アキタブキ・タラノキ・ノイバラ・ヤマグワなどが見られる。

(30) スギ植林

この群落は全植林地の大部分を占めている。山地帯から低地帯から低地までの各クラスに共通して出現している。比較的沢沿や斜面下部のようなやや湿潤な環境のところに植林されている。低木層にウリノキ・ヤマグワ・ニワトコなどが出現する地域は成長は良好であるが、ミズナラ・カシワ・ススキなどが混交すると成長は極端に悪くなっている。

(31) カラマツ植林

比較的乾燥または貧養な立地にも生育し、霜害に強く生長が早いため一時広く植栽された。県内のものはすべて人工林であり、大規模なものは無い。若齢林の場合、樹冠はうっ閉し林床は暗い。そのため草本類は少ない。

壮齢ないし老齢林になると下枝が脱落して明るくなり草本類も増えてくる。落葉の腐植がなく乾燥する。チジミザサ・オオタチソウ・ミレ・イチヤクソウなどが優占し、フキ・タラノキ・ワラビなどの伐採地に見られる植物も多い。

5. 資料リスト

資料番号	筆者名（発行機関名）	発行年 （西暦）	資 料 名 ・ 発 行 所 名 簿
1	環 境 庁	1976	第1回自然環境保全基礎調査 現存植生図（20万分の1）
2	青 森 県	1977	青森県現存植生図（5万分の1）
3	”	1976	青森県自然環境保全基礎調査 報告書（20万分の1）
4	環 境 庁	1979	第2回自然環境保全基礎調査 （特定植物群落調査）報告書
5	責任編集 宮脇 昭	1978	日本植生便覧

6. 調査担当者名簿

番 番	氏 名	所 属	分 担 分 野
1	三 上 四 郎	自 然 保 護 課 長	総 括 責 任 者
2	山 田 耕一郎	青森県自然環境保全調査会	調 査
3	原 子 一 男	”	”
4	斉 藤 宗 勝	”	”
5	赤 坂 正 一	”	”
6	斉 藤 正 宏	自 然 保 護 課 班 長	調 査 企 画 指 導
7	相 馬 義 信	” 主任主査	”
8	原 田 直 英	” 技 師	”

第2回 自然環境保全基礎調査

植生調査報告書

昭和55年3月31日

編集 青森県

環境庁委託調査

